

中国語会話教室における自称詞と対称詞

王 度* 金 濤*

Terms of self and address terms in Chinese conversation classroom

Wang Du Jin Tao

Abstract

In the Chinese conversation classroom, there are variously word to which the talker indicates self and word to which the talker indicates other party of speaking, and moreover, their usage is also very complex. The author discusses the problem from four respects such as the classification on form, functions in the syntax, using under the conversation properly and the conception on the Chinese expression.

キーワード：自称詞、対称詞、人称代名詞的用法、呼格的用法

Keywords: terms of self, address terms, pronominal use, vocative use

一、問題の提起

中国語会話教室では、話し手が自分のことを「我（ウォ）」といい、話しの相手を「你（ニー）」と称して、前者が一人称代名詞で、後者が二人称代名詞だというように取り扱われているのは一般的なことである。その会話テキストを考察してみれば、「我」と「你」のような人称代名詞は、いつも主語や目的語または連体修飾語として用いられ、構文上欠かせない文法的な機能も持つし、特に口を開けば繰り返し繰り返し出てきて、誰が誰に話しをしているかを明確するように話者に取り立てられる傾向も見える。これと反対に、現代日本語では、「わたくし、ぼく、おれ、…」のようなことばと、「あなた、きみ、きさま、…」といった一連のことばは中国語のほうに比べて数も多いし、実際には余り用いられず、むしろできるだけこれを避けて何か別の言葉で会話を進めていこうとする傾向も明瞭である。

中国語の人称代名詞とは著しく性格を異にしているので、日本人の中国語学習者には、「我」と「你」の欠如で主格或いは目的格を持たない文を言い出したり、余計に「わたし」「あなた」を取り立てる日本語の訳文を作ったりすることがよくある。それに日本語対話における話し手と話しの相手を意味することばにも、人柄や対人関係などの意味合いが含まれているから、気軽に「我」「你」をそれぞれ「わたし」「あなた」などのようなことばに言い換えて済むわけにはいかない。そのため、両者の意味合いと使い分けを比較対照し、その異同を徹底する必要があるのではない

* 教養部 中国中南大学外国語学院講師、 中国中南大学外国語学院講師

かと思う。ここでは、中国語会話教室で出てくる人称代名詞をめぐって、その形態上の分類、構文上の文法的機能、対話中の使い分け、または中国語表現上の発想など、といった四つの面から論ずることにする。

ところで、自分に言及することばが一人称代名詞で、相手を指すことばが二人称代名詞だとする言い方は今もって広く一般に通用しているが、もしそのまま忠実に引き継ぐとすれば、次に述べようする言語上の事実とは相容れない誤りになってしまう。たとえば、論文を発表するためのレジュメでは、自分に言及するとき「我」と言わず「筆者、論者」などのことばを使うのが一般的である。また、会話テキストでは、身分名称や職業名称、または待遇関係などを意味する名称などが話しの相手と呼ぶことばとして使われるということもしばしば出てくる。それらをすべて中国語の一人称や二人称としたら、おかしいことになるのではないか。それと同じように、「わたし、おれ」や「あなた、おまえ」などを人称代名詞とすることも、日本語の事実から遊離して異質の文法概念の直訳的輸入に過ぎず、それぞれを自称詞 (terms of self) と対称詞 (address terms) と呼ぶ方が適切であると、鈴木孝夫氏は主張している^{注(1)}。前者は話し手が自分に言及することばのすべてを総括する概念で、いわゆる一人称代名詞も当然ながら含まれている。後者は話しの相手に言及することばの総称であり、二人称代名詞は対称詞の極く一部となるに過ぎない。したがって、以下はこのような観点を下敷きにして検討することにしよう。

なお、中国語会話の中に登場する第三者を言及するとき、「他 (男性を指す語)」や「她 (女性を指す語)」、または「它 (非情物を指す語)」などのような専用のことばが用いられ、一般的に三人称代名詞と呼ばれる。これらも自称詞と対称詞にある差異のように、それぞれ「かれ」、「かのじょ」、「これ、それ、あれ」の指示代名詞に置き替えることができないわけであるが、実際の会話では、ほとんどの場合はその第三者の社会的身分をあらわす名詞や、待遇関係、親疎関係などの意味を含む代名詞で言い換えることもできるし、また対話の場における話し手と相手の具体的な役割を明示し確認するという機能も持っていないので、中国語三人称代名詞への理解や習得には紛らわしさや面倒さがそれほど多くないと思う。以上が原因に、ここでは考察をしないことにする。

二、自称・対称詞の形態

中国語の自称詞はその単数がふつう「我」一つで、複数が「我們」一つであるが、実際の会話の場において話し手を指す役割を持つ自称詞には、また「咱、咱們 (複数)、本人 (あらたまった場合)、自己 (モノローグの場合)、人家 (親愛感が持つ女性用語)」などもあるし、「爸爸、妈妈」などのような親族名詞や「老師」などの職務名詞までも自称詞として使うことができる。その中では、専用の自称詞の「我」は、『論語』や『孟子』にすでに出ていて、恐らく何千年以上にわたって守り継がれて来たことになる。文字としてまた「吾、余、予」などという古典漢文の自称詞もあるが、その発音がほぼ同じことから察せられるようにいずれも当て字 (仮借) で、今は現代中国語の口頭語から消えてしまっている。

日本語の自称詞には「僕、俺、おいら、わたし、わし、わて、自分、我輩、こちら、当方」、それに「わたし」系統の派生語で、「わたくし、あたくし、あたし、あたい」、書き言葉や特殊な用語にまで広げれば「小生、拙者、それがし」など、まだまだ現在でも使われている。明治・大正文学や、さらに古典語にまで目を広げればもっと語彙は増えていく。その複数形は「われわれ、わたしたち、われら」など、さらに接尾語「たち、ら、ども」をつけたものなど多くある。

中国語対称詞の単数は「你」と「您（ニンと発音して近世になって表敬の人称代名詞として出てくる）」であって、その複数はふつう「你們」だけである。それ以外に、会話の話し相手を指す場合、親族名詞、または相手の苗字のあとに「小、老」という接頭語をつけたり、敬称の「先生、女士」や職業名詞の「老師、医生」や職務名詞の「教授、科長」などをつけたりして、対称詞として用いられることもよくある。「爾、汝、子、若、而」などの対称詞もあるが、古典漢文として現在では使用されないようになっている。

日本語対称詞はその代表的なものとして「あなた、きみ、おまえ」などがあるが、また居場所に関係する「おうち、おたく、おまえ」、方向の指示から来た「そなた、そちら」、自称詞転用の「てめえ、ご自分」などがあり、職業職務名詞や親族名詞など由来の対称詞もかなりな数ある。その複数は「あなたがた、あんたたち、きみら」のように、「かた、たち、ら」の接尾語を単数対称詞につけたものが沢山ある。現代標準日本語の自称・対称詞は古代日本語に遡ることができないばかりではなく、歴史上で次々と目まぐるしいほど交替している。たとえば、「ぼく」のような自称詞は口頭におけるその使用歴史がわずか百年あまりという新参者にすぎない^{注[2]}。

以上に羅列したことから、中国語と日本語との自称・対称詞には、中国語の「我」のような固有で専用のものを除いて、歴史的交替・変遷の問題も実質詞からの転用・代用の現象も同じく存在しているし、社会的な人間関係の意味合いも、親疎待遇の含みも同様に持っている、という類似性が見えるだろう。

三、構文上の文法的機能

中国語の文構造をきわめて大づかみに捉えれば、主語が文頭に出て、その次に述語が来て、目的語が述語のあとに置かれる、というように順序的に並んでいるのは基本的な構文ルールである。日本語の格助詞のようなものがないので、自称・対称詞が主格となるか、それとも目的格となるかは、その文上の位置によって決まって来る。つまり、主語は文の始めに、目的語は述語の後に置かなければ分かりにくい。さらに中国語文の述語は動詞の語尾変化もいっさい持っていないので、会話の現場において主語の自称・対称詞、または目的語の自称・対称詞は明示しなければ、誰が誰に話すのか、話者が言及するのが自分のことか相手のことか、などということが不明確になる。しかし日本語の構文ではそれと違って、「何が」の主語や、「何を」の目的語の略された形がよく出てきて、時には文法的にそれらを補うことが不可能な場合も多い。

日本語には用言の五段変化があるので、主語の「わたし、あなた」などはその変化によって分かるし、省略されることもよくある。たとえば、話し手が話し相手に「来る」、「行く」ように言

いつけるとき、「こい」「いけ」と言って済み、対称詞がなくてもいいが、中国語の「来、去」という動詞は、「来い、行け」のような命令形がないので、「你」を文頭に置かなければ、話し手から話し相手に対する命令の意味にはならない。ここで注意しなくてはならないことは、動詞による主語の自称対称が自明になることは中国語ではまれであるということである。日本語の「来る」と「行く」が、「わたしがあなたのところへ行く」と「あなたがわたしのところへ来る」というように自称と対称で使い分けられて、「わたしがあなたのところへ来る」という言い方はない^{注(3)}。それに対して、中国語の方では、「我来（去）你那里」と「你去（来）我那里」のように、「我」と「你」のいずれかが主語の場合でも、「来」も「去」も使うことができる。また、授受関係の表現では、「やる、あげる」を使ったり「くれる、くださる」を使ったりするように、授受動詞の使い分けによって、主語の人称詞をわざと言い出さなくても授与の主体と対象とが自然に分かるようになるが、それに対して、中国語の授受動詞の「给」は、話し手が話し相手に対する場合でも、話し相手が話し手に対する場合でも同じように使われている。要するに中国語文では、「我、你」の省略どころか、文頭の主語に取り立てなければ、話し手と話し相手の間の往来関係や授受関係などの主体客体関係は表現できなくなる。

形容詞の述語の文では、日本語では、たとえば心理状態や感覚を表す場合、「(わたしは) 嬉しい」、「(わたしは) 痛い」と言えても、話し手の相手に対しては、「(あなたは) 嬉しい」、「(あなたは痛い)」とは言わず、「嬉しそうだ」や「痛がっている」という形式で表現せざるを得ない。そこで述語の変化によって自称・対称詞が決まってくるので、それらを省略してもかまわない。しかし、中国語の方ではその形容詞の性質による自称・対称詞の使い分けはない。

もちろん、中国語の構文でも、動詞によって主語の「我、你」が省略されることはまったくないということではない。その場のコンテキストの依存によって自明になることもあれば、数の少ない丁寧なことばが、「光臨（尊敬語）」や「拝訪（謙遜語）」などのように、述語として使われると余計なものになることもある。しかし、整った形の文としては主語の欠如は認められないことである。とくに受身文や使役文などでは、主語の「我、你」と、目的語の「我、你」はどれも欠かせない。

四、対話中の使い分け

対話の現場で中国人が自分をどのようなことばで呼び、また話しの相手をいかなることばで捉えているか、という問題については、まず中国語会話テキストにある例文を分析し、さらに自称・対称詞使用の一般的現状に広げて考察することにしよう。

- ① 山田：我去图书馆还书。老师，您现在方便吗？（筆者による訳文：わたしは図書館へ本を返しに行きます。先生、ご都合はよろしいですか）^{注(4)}
- ② B：今天王先生给我们看这么好的电影，谢谢你。（著者による訳文：今日はこんないい映画を見せていただきまして、王さん、ありがとうございました）^{注(5)}
- ③ 店員：我们进货都是一千六百块。（筆者による訳文：弊店は仕入れの価格が今までずっと 1600

元です) 注(6)

例①の「老师」と例②の「王先生」は内容的に話しの相手を指して、じつに「您」あるいは「你」の代わりに使われるのである。それは人称代名詞的用法 (pronominal use) の対称詞という。また、例③の「我们」は、話し手だけでなく話し手側の商店をも指すのだが、現実には「本店」や「弊社」などという実質名詞はもっと通用していて、その場合代名詞的用法の自称詞になる。ここでは、相手がその値段に疑いを持っているので、店員さんは自分の説得力を高めるために「我们」を用いるのである。人称代名詞の複数には、そもそも自分側の弱さを補い守るという自己主張の意味合いがあるから。また、例①の「老师」という対称詞は、相手の注意を引いたり相手に感情的に訴えたりする役割を持っているので、呼格的用法 (vocative use) の対称詞とも呼ばれる。

さて、そういうふうに理解された自称・対称詞は中国語では、対話の範囲をもっと広げると数え切れないほどある。その使い方には、目上 (上位者) と目下 (下位者) という上下の分極、または親密感と疎遠感の分極とが基本的な規則として見られる。中国語会話教室では、学校、病院、商店、郵便局などのような社会的コンテクストの対話場面がよく見られ、それ以外は家庭内の対話場面である。以下、その二つの場をめぐって、それぞれ対称詞と自称詞の使い方を概要的にまとめてみよう。

社会的コンテクストの対話では、上位者の聞き手や、配慮の要る聞き手に向かって、地位や身分などを表す人称代名詞で呼ぶことがあるが、その代名詞の後ろに、「您」あるいは「你」がまたくることが、例①のように一般的である。「你」しか呼びかけないことは部下や後輩や年下に限られる。例②の「先生」、あるいは相手の苗字の後ろにそれが来る形式は、目上の男性の相手に対して用いる以外に、丁寧に扱う必要のある男性の相手に対しても用いられる。また、同僚の先輩に向かって、その苗字の前に「老」という敬意を表すことばを付加して呼ぶことも、部下や後輩などの聞き手に向かって、「小」という親密感を表すことばを添付して呼ぶこともよくある。日本語の場合はそれとほぼ似ているが、「先生の奥様おかげいかがですか」とは言うが「あなたの奥様……」とは言えないものである。反対に課長が部下に対して「きみの奥さんよくなったかね」と尋ねることは許される。名前の後ろに地位・資格の名詞がくる点では、日本語も田中先生とか山田課長のよう、苗字だけで呼ぶのはかなり珍しいケースである。

中国語では話し手が自分のことを呼ぶとき、年配、親疎、性別、身分、職務などをいっさい問わず専用自称詞の「我」が使えるが、特定の場合、たとえば先生が生徒に「老师」と自称したり、生徒が先生に「学生」と自称したりすることができるように、自分を地位や資格を示す名詞で呼ぶケースもある。それに対して、日本語では生徒が先生に「学生」と自称することができないので、上位者に自分のことを自分の身分名や地位名などで呼ぶことができないようである。しかし医者、看護婦、警官などは、相手が子供のとき自分たちのことを、それぞれ「お医者さん、看護婦さん、おまわりさん」などと称することができる。それに上位者に自分のことを苗字あるいは名前で呼ぶことは、「課長、これはぜひ山本にお任せください」のように、日本語にあるが中国語にはない。また、下位者に向かって自分の名前で自称することは中国語にも日本語にもない。

以上の社会的コンテクストの対話に見られる使用規則も、ほとんどそのまま親族（家族）内の対話にあてはまる。自分より上の世代に属する者は一般的に目上であり、自分と同じ世代の者との間で年齢の上下が目上目下を決定する。夫婦の間では年齢差はあまり意味がなく、別の要素でどちらが優勢かを決めているようだが、ふつう同位者だと考えられている。

話し手（自己）が目上に位する者を呼びかけたり言及したりするとき、「爷爷（おじい）、奶奶（おばあ）、爸爸（パパ）、妈妈（ママ）、哥哥（お兄さん）、姐姐（お姉さん）」などのように、親族名称を使うことが一般的で、その親族名詞の後ろに「你」が来る形式もある。「你」しか使わないことはまれであるが、名前だけで呼ぶこともない。ただし身分や世代しか表さない親族名詞は、「祖父、祖母、父親、母親、兄、姉」などのように、対話には出てこない。目下に位する者に向かうとき、すべては「你」で言及することができ、名前で呼ぶことができる。特に身分も世代も表す親族名詞は、たとえば「儿子（むすこ）、女儿（むすめ）、弟弟（おとうと）、妹妹（いもうと）」などのように、呼びかけたり言及したりすることもできる。それとは違って、日本語の場合には、上位にある親族に対して人称代名詞を使って呼びかけたり、直接に言及したりすることができない。それに下位にある親族には、たとえば自分の弟に「おい弟」と言ったり、息子に対して「息子はどこに行くの？」などと言ったりすることはできないであろう。

中国語では、目上の親族に向かうときも目下の親族に向かうときも、話し手が自分を名前で称することはない。これとやや違って、日本語の場合は、目下の親族に向かうとき中国語と同じであるが、目上の親族に対して名前で自称することができ、たとえば娘が母に向かって、「良子これ嫌いよ」などということがある。中国の話し手は目下の親族を相手とするときは、自分を相手の立場から見た親族名称で言うことができるが、目上の者に対してもそれができる。日本語はこれと部分的に類似点を持っており、兄が弟と話しをするとき、自分を「兄さん」などと称することができるが、弟は兄に対して自分を「弟ちゃん」とは言わない。

ところが、中国の家族間の対話をさらに詳しく観察してみると、その使い方はもっと複雑になる。父親が子供の前で、自分の父のことを、「爸爸」と言わず「爷爷」と呼んだりすることはふつうであるし、夫婦の間の対話において、妻が夫のことを「爸爸」と、夫が妻のことを「妈妈」と呼ぶことも多くの家庭に見られる。それは人類学によって親族名称の虚構的用法（fictive use）と考えられている。その用法には、他者中心的用法（allocentric particulars use）と自己中心的用法（egocentric particulars use）とがあって、前者は上に挙げた例を見て分かる。鈴木孝夫氏の解釈によれば、妻が子供の前で夫のことに、「爸爸」と言及できるのは、彼女が心理的に子供の立場に同調するからである。彼女は、自分自身の立場から見れば夫でしかありえない人物を、子供の見地を経由して見直すのである。面白いことに、子供の立場、子供の視点へ歩み寄る現象は、中国語にも日本語にも見えていて、鈴木孝夫氏がそれを共感的同一化と呼ぶ。また、社会的対話では、血縁関係のない他人に対して、親族名称を使って呼びかけることは、中国語にも日本語にもよくあって、自己中心的用法が見られている。つまり、話し手が自分自身を原点として、相手がもし親族だったら、自分の何に相当するかを考え、その関係にふさわしい親族名称を対称

詞または自称詞に選ぶのである。たとえば、若い人は他人である老人に対して、「爷爷（おじいさん）、奶奶（おばあさん）」と、中年の人を「叔叔（おじさん）、阿姨（おばさん）」と呼びかけたり言及したりすることができる。また自分より年下の者に対しては、それと同じように自称することもできる。

自称・対称詞の使い方がそれほど複雑になるのは、話者が相手の視点も自己の視点も選べることが原因であることは以上に述べたのだが、それはまた次の二つのことも原因として考えられている。一つは、佐久間氏によって指摘された、自称・対称詞のタブー型変化によることである。もう一つは、対話におけるその使用の相互相称性(symmetrical)と非相称性(asymmetrical)によることである。言語学上のタブーとは、ある事柄に対しては、宗教的理由、恐怖感あるいは羞恥心などから、直接その名を口にすることを避け、どうしても回避できない場合には、間接暗示的に、何かほかのことばを使ってそれに言及する行為を言う。中国語の自称・対称詞の使用では、親族名詞などを血縁関係のない他人に対して使う場合のように、回りくどい表現を用いる事実は、正にタブーの性格を持っていると思う。また、上の例①では、学生は先生と話し合うとき、自分を「我」と言って、相手を「先生」とか「您」とか言うのだが、話し手と聞き手との交替しあう対話では、「我」 \longleftrightarrow 「你」という自称詞と対称詞の交換はその場に見られない。つまり、非相称性の使用になる。しかし、「我」「你（您）」という専用のことばには、対話の場における能動的行為者と受動的行為者という抽象的な役割も持っているので、話し手と話しの相手との間にある「我」 \longleftrightarrow 「你」の交換は、やはり中国語の対話に見られていて、相称性の使用も併行している。

五、中国語表現上の発想

中国語会話教室においては、文の中でいちいち「我」や「你」を文頭に取り立てて、その対話を進めていくことがよく見られるが、それは中国語表現に働いている発想とかかわるのではないかと思う。次は、中国語会話のテキストから例文を抜き出して分析してみよう。

④ 这一个月来，我们做了非常有益的参观和访问，加深了对贵国的理解。这都是王先生热情招待我们的结果。（著者による訳文：この一ヶ月ばかり、われわれは本当に有意義な参観や訪問をいたしまして、中国に対する理解を深めることができました。これはまったく王さんの真心のこもったご接待のおかげだと思っています）^{注(7)}

⑤ 我是山田一郎。这次能有机会来访问贵国感到十分高兴。（著者による訳文：わたしは山田一郎です。このたび中国を訪れることができ、大変喜んでおります）^{注(8)}

⑥ 哟，十一点了，你们两位该休息了。（著者による訳文：あ、十一時です。お休みにならなければ）^{注(9)}

⑦ 佐佐木太太，我帮您拿旅行包吧。（著者による訳文：奥さん、旅行カバンをお持ちしましょう）^{注(10)}

例④の「这都是王先生……的结果(それはすべて王さんの……による結果だ)」という構文から、

中国人の話者は出来事や事柄を、主体からの働きかけによる結果としてとらえる傾向が見える。そのため、例④の「加深了……理解（……理解を深めることができる）」と、例⑤の「能有机会来访问……（……を訪れることができる）」というような能動的な表現に成りやすい。自然の成り行きと認識する場合はないわけではないが、それほど多くない。

例⑥では、もしもその文末に省略された「（……お休みにならなければ）と思うから、私はいとまを告げる」という部分を補えば、相手に対する主観的な判断によって話者が積極的に行為を行う、といった意味合いは、実に持っているのである。ここでは、恩着せがましがる言い方になるおそれがあるが省かれるのだが、現実の場には、「……两位该休息了。所以，我也要告辞了」といった意志的な表現は、もっと広く一般に用いられている。

例⑦では、「我帮您……（わたしがあなたを助けて……）」の後ろに、「拿（持つ）」という話者の行動もくる。ここでは、話者の視点は主体の行為からはじめて、その行為の及ぶ対象へと移っていて、その主体の行為によって表現が進んでいくことが見られる。そのため、話し手や聞き手を客体化して文中の主語に立てる構文形式が好まれて、「我」や「你」の現れる率が高い。

例⑧には「（我）感到十分高兴（わたしは大変うれしいことと感じている）」という部分があるが、話者自身の心理的な状態についての説明は動詞による傾向が見られる。特に改まった場合には、そういう表現に成りやすい。しかし、日本語はそれと違って、感情や感覚を表わす形容詞は、主観的で自己の立場で事態をとらえようとする傾向があつて、話者自身のことなら「（私は）うれしい」と形容詞の文で表わすのがふつうであろう。三人称を主体とした表現だったら、恐らく「彼は大変喜んでいいる」のように動詞で言い換えたり、「そうだ」を付けて事態を客体化するように表すことであろう。そういう意味で、中国語には自分を客観的な存在物として傍観的に表現する慣習がある。

以上、中国語表現にある発想については不十分な認識であるが、その特徴を四つほどまとめてみた。

注釈

注(1)：『ことばと文化』 p 134。

注(2)：同上、p 141。

注(3)：『一人称二人称と対話』 p 115。

注(4)：『スタートしよう！中国語！』（陳月吾、卞惟行 晃洋書房 2006） p 118。

注(5)：『中国語会話入門』（大河内康憲 海文堂 1968） p 184。

注(6)：『スタートしよう！中国語！』。 p 68。

注(7)：『中国語会話入門』（大河内康憲 海文堂 1968）。 p 214

注(8)：同上。 p 80

注(9)：『実践中国語会話』（香坂順一、康玉華、王徳珮 東方書店 1999） p51

注(10)：同上。 p 42

参考文献

- 『ことばと文化』（鈴木孝夫著 岩波書店 1973）
- 『一人称二人称と対話』（三輪正 人文書院 2005）
- 『敬語表現』（浦谷宏・川口義一・坂本恵 大修館 1998）
- 『日本人の発想、日本語の表現―「私」の立場がことばを決める』（森田良行 中央公論社刊 1998）
- 『日本人の表現力と個性』（熊倉千之 中央公論社 1990）

（平成 22 年 3 月 31 日受理）